

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：Henry Tsang (ヘンリー・ツァン) (カナダ)
- (2) 年 齢：44 歳
- (3) 参加事業：平成 28 年度次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」ナショナル・リーダー (※SWY29 相当) (2016 年度)
- (4) 職 業：カナダ・アタバスカ大学助教授、「ヘンリー・ツァン建築事務所」設立者兼主席建築家



■参加のきっかけ

「世界青年の船」事業（以下、「世界船」という。）はカナダでは大変よく知られている青年リーダーシッププログラムで、日本国大使館・領事館や日本関連ネットワークを通じて広報されていますので、特に日本とのつながりがある人は知っています。私は大学時代から日本文化、特に日本のデザインと建築にとっても興味があったため、日本への渡航、学び、そしてつながれる機会を探していました。さらに、リーダーシップや国際感覚を身につける機会も魅力を感じていました。2005 年、中国優秀青年シナジー計画（香港・中国）に参加した際、オーストラリアの青年と知り合いになり、彼が世界船の既参加青年だったのです。彼は政府職員で、参加青年と管理部の 2 回参加したと言っていました。彼から話を聞き、世界船のような学習環境は素晴らしいと思っていました。調べてみると、参加国は毎年変わることも知り、ソーシャルメディアもフォローし、SWY カナダのニュースレター（E メール）にも登録していましたので、告知が出た時に分かりました。結局私は 10、15 年ほど世界船の情報を追いつけ、やっと第 29 回に応募できるとなったわけです。実は第 24 回の世界船にも応募したのですが、その時は応募完了となりませんでした。2 回目に応募するまでに、私は建築家および大学教員としてキャリアを歩み始めており、青年への教育やリーダーシッププログラムを主導する経験もあったため、カナダのナショナル・リーダーのポジションに応募したのです。代表団 12 名の枠に約 200 名が応募し、ナショナル・リーダーに対しては応募用紙、職務経歴書、エッセイ、リーダーをした経験や日本文化との関連を語った動画の提出が求められました。その後世界船事後活動組織（SWYAA）カナダとの面接があり、最終的に日本国大使館が承認するという形でした。この機会に国を代表してリーダーシップを発揮し、世界中の仲間から学びたいという意欲がありました。私が世界船に期待したのは、**人生を変えるような、そして世界に対する視野を広げるような、刺激的な体験**でしたし、私の期待は間違いなく満たされ、それ以上のものでした。

■コミュニケーションが深みを増す

第 29 回世界船に参加した当時、私は建築家と教育者としてキャリアをスタートしており、国際開発、協力、教育分野でのグローバルなキャリアを夢見ていました。世界船では、船内で割り当てられた様々な役割を通じて、リーダーシップの強化、実践をすることができました。特に、ナショナル・リーダーとして、自分の国およびレターグループを率い、船上での日々の生活を管理するナショナル・リーダー・コミッティにも所属しました。また、この事業では、プレゼンテーションや人前で話すことを実践する機会が多くあり、聴衆の前で話す際の自信をつけることができました。私は元々シャイな性格で、高校

でも友人から「あまり話さないね」と言われていたくらいでしたが、建築を専攻してからプレゼンテーションの機会が増え、グループでの企画づくりや、自分のデザイン、アイデアについて語る、人前で発表するということが増えました。さらに TED や国連でスピーキングの機会をもらっても、人前で話すことに苦手意識を感じていました。しかし世界船では先生と生徒という関係ではなく、一方通行ではなく、深い会話をすることができました。さらにファシリテーションの力により、より複雑で詳細なダイアログになっていったと思います。

世界中の人々と生活し、直接交流することで、**より広い視野と世界文化への深い理解を得られたことも大切なこと**です。食べ物に関しても、ある国ではこういうものを食べない、文化的理由、宗教的理由、そんなことを話します。もう少し深く、歴史について、国と国との衝突について、話すこともあります。そして意見を言っても安全、安心ということが守られています。同じ船にいるというのは、どこからも逃れられないので、他の考え方に対してもより共感が求められます。他人の意見に必ず賛成するわけではないですが、「賛成しないで終わることに賛成」という着地をします。**船の環境により、自分の視野が広がり、パーソナルになります**。世界船が終わった今日も、その視野を持っています。

■ 印象深い PY セミナー

私にとって最もポジティブな影響があった活動は「**PY セミナー**」で、世界各国から参加した青年たちの豊富な知識を交換し、学ぶことができました。例えば、あるエジプト青年は外交官で、**国連の「持続可能な開発目標（SDG）」**に精通しており、SDGs と自国での取り組みに関するワークショップを開催しました。これを受けて、私たちカナダ代表団も同様のセミナーを開催し、サステナビリティについて専門性を持つ私を含めた 3 名が講師を務めました。どちらのセミナーも、SDGs 実施のための戦略やベスト・プラクティスについて情報交換し、非常に貴重でした。もう一つの例は、ニュージーランド代表団が主催した**マオリ先住民の文化**に関する PY セミナーです。これを受けて、カナダからも先住民メンバーが、カナダ先住民の歴史と権利に関するセミナーを行い、両国の比較は非常に興味深いものでした。

私は PY セミナーで「**クリエイティブ・リーダーシップ**」について、4 回のシリーズとして企画、発表しました。「**デザイン思考**」においてどうスケッチが利用できるかを紹介し、20～30 名が参加しました。参加青年には国際関係、政治、法学に背景を持つ人が多く、アーティスト、音楽家など、クリエイティブ分野が専門の青年が少なかったように思います（もちろん楽器が弾ける人は多くいました）。そこで、私はクリエイティビティや表現、芸術を通じたコミュニケーション、どう「既存の枠組みを越えて新しい方法を考えるか」について語れると思いました。どうクリエイティビティとリーダーシップが重なるかについても話しました。実際のセミナーでは、スケッチブックに絵を描いてもらいますが、頭の中の思考から実際の絵になるまでに、文化的フィルターを通していることが分かります。何色を使うか、どう線を引くか、人をどう描写するか、それをどう解釈するか、などが文化によって異なります。他の PY セミナーよりも「ソフト」なアプローチを取っていたので、参加した人たちは楽しんでいたようです。

■ 学術メンバーも情報交換していたようですね。

参加青年のうちアカデミック関係者（大学院生や若手の大学教員）による一連のセミナーを企画し、学術交流のプラットフォームとして「**SWY 大学**」を形成しました。私は当時大学教員として 2 年目で、エジプトやインドの青年で博士課程を終えてこれから教えるという段階の人や、ファシリテーターの中にも大学教員がいたので、セミナーやワークショップ形式で、それぞれの研究について話すのもいいと思ったのです。日本青年は、卒論に取り組んでいる人もいましたし、どう論文を書くか、どう議論を展開し分析するか、ということを話しました。このプラットフォームは乗船期間のみでしたが、アカデミック関係者で話すということに意義があったと思います。



クリエイティブ・リーダーシップに関する PY セミナー

■コース・ディスカッション

私の成長に最も有益だった活動は「PY セミナー」だとお伝えしましたが、もう一つ挙げるとすれば、「コース・ディスカッション」です。私のキャリアや仕事に直結する特定のトピックについて体系的に学ぶことができ、非常に価値のある活動でした。私は、「災害リスク軽減のためのキャパシティ・ビルディング」コースに参加しました。このコースでは、世界中で起きる自然災害の影響や、地球規模の気候変動がもたらす壊滅的な影響に目を向けることができました。また、JICA の ODA プロジェクトで設計コンサルタントを務めたり、災害復興に関する大学間ワークショップを主催したり、建築におけるデザイン・レジリエンスをテーマに数えきれないほどの講義を行っています。



■ 寄港地活動で考えた先住民の課題

ニュージーランドのオラケイ・マラエ（集会所）への訪問が最も有益でした。カナダでは先住民と権利の問題が急務であり、先住民の聖地に入り、ニュージーランドの人々がどのように先住民との「正しい関係」の実現に向けて取り組んでいるかを知ることができ、大変勉強になりました。実は私にとって先住民との初めての接点は、第 29 回カナダ代表団のヌナブト準州からのメンバーでした。先住民が歴史の中でどう扱われてきたかを彼女から学び、そして世界船の期間中はニュージーランド代表団にマオリの青年がいましたので、先住民との関係を 2 カ国で比べるなど、よく話をしました。世界船に参加してから、私の中で先住民の影響や関係性は根本的に変わり、そしてここ 5 年でさらに強くなっています。

先住民への理解は、まず住民の文化やアイデンティティを理解するという点において、私が建築物を設計するプロセスにも影響を及ぼしています。文化のデザインへの影響、アイデンティティとしての表現という話をしましたが、教育で「先住民の知識」というのはあまりにも無視されてきたと思います。私は建築に携わっているので、先住民の学者たちに土地の活用について相談することがあります。というのも、土や水、木、空気に魂が宿ると考えられているからです。

■ 世界のリーダーと話せる、表敬の機会

私はこれまでも多くのユースリーダーシッププログラムに参加し、留学経験もあります。内閣府事業が他と大きく違うのは、**日本や各国の政府が積極的に参加し、外交や政府とのつながりが強いこと**だと思います。私たちのような**新進気鋭のリーダーと、今日の世界のリーダーをつなげる、これほど格調高いプログラム**を経験したことはありません。この事業を通じて、私は安倍晋三首相（当時）、皇太子殿下、妃殿下だけでなく、フィジーやニュージーランドのトップ閣僚にもお目にかかりました。世界船の質の高さと知名度を考えると、「参加青年」になるための競争率も非常に高いですが、結果としてそれぞれの国のエリート青年メンバーが参加することとなり、世界の青年向け事業で最も刺激的なものの一つであるでしょう。

実際の表敬では、どんなことが印象に残っていますか。

ナショナル・リーダーは表敬の機会が多いのですが、トップリーダーとお話できることがあり、船内で私たちが青年として話していたようなことを伝えるというところに価値があると思います。私たちの発言が、世界レベルで影響があると感じられる瞬間なのです。ですから、表敬は写真撮影など形式的、セレモニーとしての動きもありますが、表敬の価値をより上げることができるとしたら、青年の考えていること、課題意識を直接お話しできるという点にあると考えます。例えばフィジーではバイニマラマ首相に表敬できたのですが、バイニマラマ首相は COP26 の議長役を務めましたので、気候変動について何か意見がある青年であれば、お話しする機会は貴重と言えます。青年はトップリーダーと話せたことで、自分達の声を広めることができたと思うでしょう。



安倍首相（中央）と世界船のナショナル・リーダーたち



フィジーのバイニマラム首相（左）と
筆者（中央）

■ 日本の印象の変化

私は世界船以前から、日本と強いつながりを持っていました。過去に文部科学省の奨学金を受け、東京大学で建築の博士号を取得しています。卒業後は日本に残り、日本設計という日本企業で働きました。2002年から2012年まで、合計10年間日本に滞在しました。世界船の後、私の日本に対する印象は向上しました。福井でのホームステイでは、それまで行ったことのない土地に行き、日本の田舎での生活を体験することができました。日本の文化プログラムやプレゼンテーションを通して、日本文化への理解を深め、多くの日本参加青年や管理部と、生涯の友情を築くことができました。2017年に私は日本人女性と結婚し、現在子どもが一人、もうすぐ双子が誕生します。私たちは日本とカナダの両拠点を行き来していますので、日本は第二の故郷とも言えます。また、私は日本建築の専門であるので、現在はカナダで「日本の建築デザイン」について講義をしています。

■ 言語の壁を丁寧に扱う

「言語の壁」についてあまり船上で話すことがなく、外国青年は壁があるということを想定していません。船上では、カナダのような英語が母語の国は有利になりますし、日本を含めて英語が不利となる国もあり、そのような差を生んでしまうことに対して事前の備えが必要だと思います。私自身は日本の経験があったので、カナダ代表団に「コミュニケーションが大事。英語がネイティブの人ばかりではない。ノンバーバルでコミュニケーションすることも大事」と伝えてきました。青年の中で話していない人がいるな、ということにも意識を向け、会話が集中した時には「～～さんの意見も聞こうよ」と促しました。そうしないと、発言の時間や場所が確保されないからです。日本青年と一緒に「コミュニケーション・コミッティ」を作って、どうやったらコミュニケーションが円滑になるか、工夫を考えました。例えばグラフィックを使う、非言語のコミュニケーションを取る、などです。そして、日本青年はシャイだけではなく、安定感を持ってない状態にあります。そこで別の「セーフ・スペース・コミッティ」という委員会も作り、安心して話せる場を作りました。日本青年の発言量は少なかったため、**発言するという行為をより丁寧に扱う**場を設けました。仲間には LGBTQ の人もいて、アイデンティティが揺らぐということも起きていたので、そのことについて話してもらいました。

■ 世界船を経て、よりグローバルに発言の機会を得る

世界船から 5 年経ち、私は建築家と大学教員としてのキャリアを追求し、自分の建築事務所「Henry Tsang Architect」を設立し、カナダのアサバスカ大学の常勤助教授となりました。世界船での経験により、私は 1) より強力なリーダー、より共感できる外交官（外交実践者）、2) より感受性の高い建築家、3) よりパワフルに人前で話し、影響力のある教育者、の 3 つの変化を得ることができました。人脈という意味では、知識の共有もありますが、スピーカーやパネリストとして話してほしいというお声がけをいただくことが増えました。先日はメキシコの事後活動組織のメンバーから、都市計画協議会で国際スピーカーとして話してくれないか、というお誘いがありました。また、先日はカナダの事後活動組織のメンバーから、コロナ禍におけるオフィスデザインについて話してほしいと言われました。学术界の私がそのような機会をいただけるのは有り難いことです。この世界船ネットワークで、**自分のスキルを伝える、違う文脈で伝える、意見交換する**、ということが学術・コンサルテーションレベルで役立っています（金銭的にプラス、ということではないです）。カルガリー・ジャパニーズ・コミュニティ・アソシエーションから新しいセンター設計の依頼を受けたのですが、私の日本文化のつながりに加え、日本政府や世界船のつながりも考慮されました。カナダは多文化国家で、文化アイデンティティの問題があるので、ヒアリングして、ニュアンスを理解し、文化の深さを丁寧に建築物に反映させていくことをします。この文化センシティブティ、文化理解は、世界船で培った力です。私の設計した新館は、2020 年カナダ建築家賞の優秀賞を受賞しました。事後活動組織カナダは世界船の事後活動として資金集めの活動を行い、このプロジェクトを支援しています。2021 年には、カナダ全国レベルの「Construction Canada Emerging Leader Awards」賞（建築において新鋭リーダーに授与される）を 2 つ受賞することができました。

■ 船を使った国際交流の強みや意義

船は移動する手段であると同時に建物（教室、寝室、カフェテリアなどがある）でもあるので、陸地をベースにバスで移動するプログラムとは一線を画しています。船に住む、つまり朝起きたら海に囲まれているという体験は、新しくかつ気持ち上がるものでした。私たちは基本的に**旅行と学習を同時に行っている**のです。そして、**一カ所に拠点を置くのではなく、常に移動している**という事実は、**私たちの地球の広大さと、文化の多様性**を思い起こさせるものでした。船では、陸から切り離され、どこの国にも属さず、文化や世界的な話題について自由に話せる空間があります。小さな船に乗っていて、広い世界のことを考えればちっぽけな存在だ、と感ずることもありました。船で普段とは違う体験をする中で、誰もが**日常生活を学び直すと同時に、新しい環境に適応**していきました。南半球ではトイレを流すと水が逆回りになることも、みんな興味を持って観察しました。船上で私たちが **新しい体験をしていたことは、集団としての絆を深めるのに大変役立った**と思います。世界船で出会った人や、訪問した先々のことを考えると、これまで色々な場所へ行ったことのある私でも、このような体験が初めて、かつユニークであったと言えます。

■ 事後活動

私は文部科学省奨学生でしたので、以前から日本国大使館や領事館、日系コミュニティセンターと強いつながりを築いてきました。文科省留学生の OB として次の候補者の選考をしたり、日本での生活や就労についてプレゼンテーションをしたりと、関わってきました。文科省の JET プログラムでも、審査員を依頼されることがあります。カナダの地方都市では「日本の祭」イベントがあるので、カルガリーでもイベントの設営プランニングを担当し、ブースで日本文化の説明をするなど、お手伝いをしました。国際交流基金の依頼で日本の建築について話したことも何度かあります。このように、世界船以前からもつながりは持っていました。

世界船参加後は、何か社会貢献意識が変わりましたか。

世界船に参加することで、**自分のスキルがどのように地域社会に貢献できるか**を知ることができ、社会貢献に対する意識が高まりました。世界船で学んだ大切なことと言えば、「まず話を聞く」ということでした。建築の分野でも学生に「まずクライアントの話を聞け」と伝えており、私たちは押しつけのためにデザインするのではなく、まず声を聞き、理解してからデザインする、このことをコミュニティにおいても徹底しました。そして、他人は自分と違うことを考えている、という認識も大切です。カナダは日本と違って、2、3人に会うだけで自分と全く背景の違う人に会うからです。事後活動組織への貢献や、日本とカナダの文化理解のためのボランティア活動に加え、私はカナダ王立建築協会のメンバーシップ委員会の共同議長を務め、**サステナブルデザインや、職業における公平性、多様性、包括性を提唱**しています。また、アサバスカ大学では、先住民の知恵を大学に取り入れることを目的とした「Nukskahotwin Council of Allies」の招待メンバーとして活動しています。私のこうした取り組みへの意識と参加は、世界船に由来するものと言えます。

■ 事後活動組織の動き

私は世界青年の船事後活動組織カナダの役員を、活動的に務めており、事業の成果を未来の参加青年に伝え、事業への参加を促し、事業を通じて得た知識や経験を地域で共有する方法を常に考えています。事後活動組織カナダの役員として、カナダ、日本、他国の事後活動組織メンバーとは密接に連絡を取り合っています。外国参加青年の場合、次に自国がいつ招へいされるか分からない状態でモチベーションを保つのは、難しいという事実はあります。次の代表団を送れるということは大切で、そうでないと既参加青年でなければメンバーになれない組織で、役員も同じ人が何度もやることになってしまうからです。

2020年、世界船事後活動組織の国際大会の、ホスト国の予定でした。

はい、事後活動組織カナダはトロントとモントリオールでの世界青年の船事後活動組織国際大会ホストに選出され、準備を進めていました。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、中止せざるを得ませんでした。フライトやホテルなど全て準備していたのに中止となってしまう、実際にデポジットを支払うような負担になった部分もありますが、モチベーションという意味でも残念でした。その代わりに、セミナーや同期会、才能を披露するショーなど、オンラインイベント「SWY バーチャル・ウィークエンド」を開催し、世界中の全参加回の既参加青年が44カ国から615人（述べ人数）参加しました。役員がデジタルに強く、ウェブサイト構築やDJ、リポーターなど、職業でも提供しているようなスキルを発揮することができました。新型コロナウイルスの大流行により、この2年間は顔を合わせたミーティングを開催することができませんでしたが、多くのバーチャルミーティングを企画したこともあり、つながりを保つのに役立ちました。

同期のメンバーとは、個別に連絡を取っていますか。

個人的には、第29回の回生と緊密に連絡を取り合い、個人的にも仕事の面でもサポートし合っています。例えば、ヌナブト準州に住む先住民メンバーが、2021年に自身の居住エリアにおいて水質汚染の問題を体験し、第29回のメンバーは、資金集めや検査キット、浄水器などをまとめて彼女に送れるよう支援しました。青年のうち2人は、JETプログラムなど、日本での英語教育の仕事を探しており、私は彼らの推薦状を準備しました。また、文部科学省の奨学金で日本の大学院への進学を希望しておる青年への指導にあたりました。その他にも献血、食料品や衣料品の寄付、地域社会支援のための募金活動などを一緒に行っています。



日本青年がカナダ訪問した際の
事後活動組織メンバーとミーティング（2017）

ヘンリー・ツァン氏（Ph. D）のプロフィール

カナダ・アタバスカ大学助教授。カナダでの大学、大学院修士課程を経て、文部科学省奨学金により東京大学での建築博士号を取得。日本企業での6年間の就労体験も有する。Herzing College（カナダ）での「サステナブルな建築技術」プログラムの講師や、Keimyung University（韓国）の建築工学科の助教授を歴任し、現職。世界青年の船事後活動組織の役員を務めるほか、各種建築関係協会にも参加。「ヘンリー・ツァン建築事務所」設立者兼主席建築家、2021年「Construction Canada Emerging Leader Awards」賞受賞。